

【原 著】

スクールボランティアへの学生による主体的参加を 促す新たな取り組みと考察

佐藤 大介 山根 文男 江木 英二 曾田 佳代子 近藤 弘行 後藤 大輔

A New Support Program to Urge University Students to Participate in School Volunteer Activities

Daisuke SATOH, Fumio YAMANE, Eiji EGI, Kayoko SODA, Hiroyuki KONDOH,
Daisuke GOTOH

2015

岡山大学教師教育開発センター紀要 第5号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.5, March 2015

原 著

スクールボランティアへの学生による主体的参加を 促す新たな取り組みと考察

佐藤 大介^{*1} 山根 文男^{*2} 江木 英二^{*2} 曾田 佳代子^{*2} 近藤 弘行^{*2} 後藤 大輔^{*2}

教員養成における学校現場での実践的・体験的活動が昨今一層求められている。教育再生実行会議での提言や中央教育審議会での報告でも、採用前の学生の学校現場でのボランティア活動を推奨している。こうした中、2013年度の岡山大学におけるスクールボランティア活動の登録者数が大幅に減少した。要因としては学校現場でのインターンシップ活動が必修化された点が大いだが、インターンシップとボランティアの長短を学生は理解し参加していく必要がある。こうした社会的要請や大学における課題などを踏まえ、スクールボランティアビューローに新たに「学生スタッフ制度」を設けた。学生の立場から、スクールボランティア活動を多面的に支援し、関連事業の企画・参画・連携を学生と教職員が協働して実施するものである。最初の取り組みとして、2014年4月には「スクールボランティアフェア2014」を開催した。

キーワード：教員養成，スクールボランティア，学生スタッフ制度

※1 岡山大学 地域総合研究センター

※2 岡山大学 教師教育開発センター

I はじめに

2012年12月第2次安倍晋三内閣が発足した後、教育再生に向けた様々な取り組みが加速している。2013年1月には「教育再生実行会議」が立ち上げられ、「21世紀の日本にふさわしい教育体制を構築し、教育の再生を実行に移していくため、内閣の最重要課題の一つとして教育改革を推進する」(教育再生実行会議ホームページより引用)ことを明記し、教育が国の政策として強化されることとなった。さらに、2013年11月、文部科学省による「国立大学プラン」が示され、大学の機能強化やグローバル化、またミッションの再定義などにより、国立大学はそれぞれの強み、特色、社会的役割を明確にし、研究・教育に取り組んでいくことが必要となった。岡山大学での教員養成分野においては、「岡山県教育委員会および岡山市教育委員会等との連携により、地域密接型を目指す大学として義務教育諸学校等に関する地域の教員養成機能の中心的役割を担う」ことが示された(文部科学省「教員養成分野のミッションの再定義結果 岡山大学」より一部抜粋)。

こうした様々な教育改革が進められる中で、学校教育改革も進められており、とりわけ大学における教員養成では、学生による学校現場でのボランティ

ア活動など実践を通じた教員養成が求められている。岡山大学教師教育開発センターには、スクールボランティアビューローという学校園等でのボランティア活動を推進する全学的な窓口組織を設置しており、教職を志す学生へのスクールボランティア活動への参加を支援している。一方で、佐藤ら(2014)が指摘しているように、ボランティア活動に関する様々な情報を一元的に管理できるシステムの構築や、マッチングの捉え方のシフト、さらにボランティア登録者数に対する実活動者数の割合の低さなどの課題が浮き彫りとなっている。

本論では、教員養成改革におけるスクールボランティア活動への学生の主体的参加の必要性に対する社会的要請および岡山大学における現在の課題を整理し、岡山大学が開始した新たな取り組み構想について説明し、その将来的展望について述べる。

II スクールボランティアへの学生による主体的参加の必要性

1 国の政策としての要請

2006年7月11日、中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」において教職指導の充実の観点から、

インターンシップなど学校現場を体験する機会や、学校外における子どもとの触れ合いの機会、現職教員との意見交換の機会等を積極的に提供することが必要である

と明記された（文部科学省ホームページより一部抜粋）。これ以前より、教員の資質向上に向けての提案や社会人活用のための教員免許制度の改革等の政策も行われてきたが、本答申により、大学における教員養成の視点として、教育実習以外にも学校現場での体験的活動が重要視されるようになった。その流れは、第2次安倍内閣で発足した「教育再生実行会議」にも引き継がれている。既に5つの提言がなされているが、そのうち2つの提言において、教員養成におけるボランティア活動への学生の主体的参加に関連した文言が含まれている。

第三次提言「これからの大学教育等の在り方について」（2013年5月28日）では、「3. 学生を鍛え上げ社会に送り出す教育機能の強化」に、教員の質向上を目的として、以下の文言が記述されている（p.7 一部抜粋）。

学生の学校現場でのボランティア活動を推進するなど、大学と学校現場との連携を強化する

さらに、第五次提言「今後の学制等の在り方について」（2014年7月3日）では、「2. 教員免許制度を改革するとともに、社会から尊敬され学び続ける質の高い教師を確保するため、養成や採用、研修等の在り方を見直す。」の項目に、第三次提言同様、教員の質向上を目的として、以下の文言が記述されている（p.7 一部抜粋）。

実践的な力を備えた教師を養成し採用することができるよう、国は、大学において、インターンシップやボランティア活動など学生に学校現場を経験させる取組を推進するとともに、採用前又は後に学校現場で行う実習・研修を通じて適性を厳格に評価する仕組み（教師インターン制度（仮称））の導入を検討する

また、中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会「これからの学校教育を担う教員の在り方について（報告）—小中一貫教育制度に対応した教員免許制度改革—」（2014年11月6日）においては、「（2）教員採用における課題」として、学校現場での活動の目的をより具体的に示した形で、スクールボランティア活動を推奨していることが伺える（p.3 一部抜粋）。

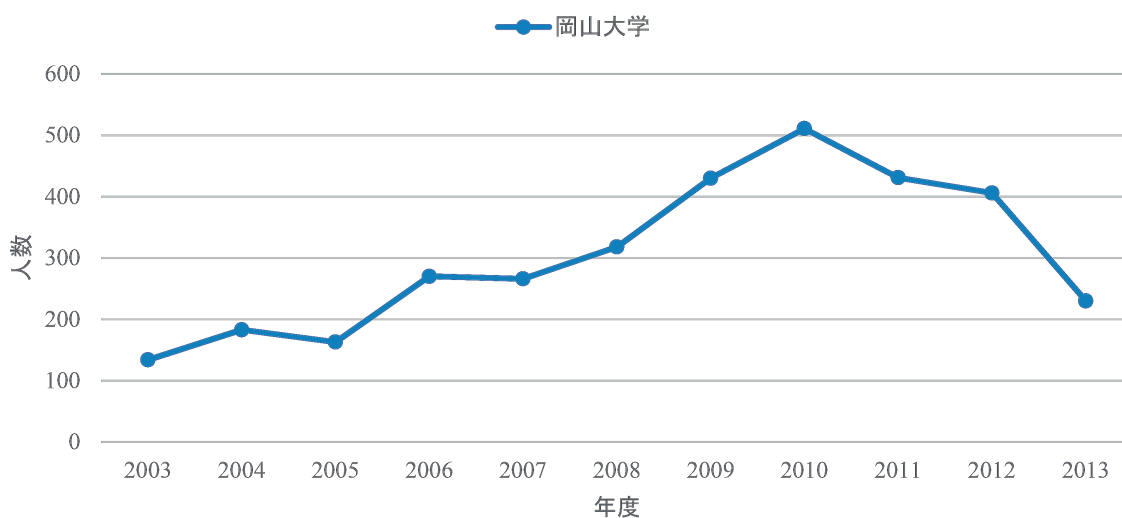


図1 岡山市「学校支援ボランティア」登録者数の推移

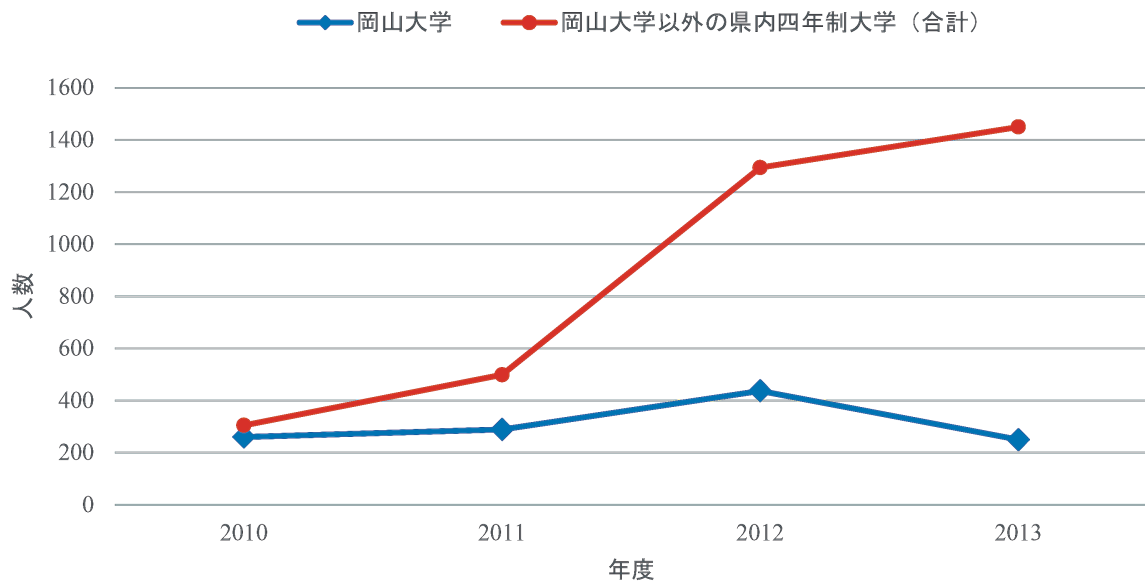


図2 岡山県「『教師への道』インターンシップ事業」登録者数の推移

採用における当事者間のミスマッチを未然に防ぐため、採用前において学校現場を経験する機会を増やすなど、互いのニーズを符号させる工夫も必要である

こうした国の政策面での要請により、大学として学生による学校現場における体験的活動としてのスクールボランティア事業を積極的かつ可及的速やかに充実化していくことが求められている。

2 岡山大学における課題

このような要請がある一方で、岡山市教育委員会による「学校支援ボランティア」（図1：平成21年～平成25年度連携協力事業研究報告書より）や岡山県教育委員会による「『教師への道』インターンシップ事業」（図2：平成23～26年度岡山県教育委員会との連携協力会議または連携協力会議専門部会配布資料より）の登録者数の推移を見ると、2013年度に岡山大学の登録者数が減少していることが分かる。特に図2では、県内の他の四年制大学の学生による登録者数は概ね上昇傾向にあるのに対して、岡山大学が顕著に減少している点において課題意識を持つ必要があった。この登録者数減少の最も大きな要因として考えられるのが、教育学部4年生の必修科目である「教職実践インターンシップⅠ」（Ⅱは選択科目）の開始である。この授業は、教職実践演習のフィールドワークとして実施するもので、学生は個々に自

己課題を設定し、それに対して実践的・主体的な取り組みを教育現場で定期的・前期の間実施するものである（詳細は岡山大学教育学部シラバス参照）。こうしたカリキュラムの導入により、学生はボランティア活動等に参加することなく、学校現場での体験的活動が可能となった。教員養成カリキュラムにおいて教育実習以外にこうした学校現場体験ができる機会が学生に提供されることは、国の政策・方針に適っており高く評価できる授業科目である。

しかしながら、授業での学校現場体験とボランティアでの学校現場体験にはそれぞれ以下のような違いが考えられる。

<授業の場合>

- ・大学と協力関係にある学校園での活動が中心
- ・時期によってはごく一部の教育活動・子供の変化を垣間見るだけに終わる
- ・自らの設定課題に対して解決の糸口を探る実践的活動
- ・指導の中心は大学教員
- ・学生は取り組み内容を評価される

<ボランティアの場合>

- ・学生ボランティアの支援を必要としている学校園での活動が中心
- ・年間を通して活動することができ学校園の教育課程の流れ・子供の変化をつかむ事ができる
- ・現場で与えられた課題に対して、自ら考え、協働して取り組む実践的活動

- ・指導の中心は学校現場の教員
- ・学生によるボランティア活動の取り組みに対する評価は基本的に必要ない

このほか、授業の場合は、大学側が準備した環境下での活動となるため、学生によっては主体的な取り組みとならない場合も想定される。一方ボランティア活動では、学校現場のニーズをとらえ、主体的に行動することが求められる。また、先に述べた「これからの学校教育を担う教員の在り方について（報告）」における「互いのニーズを符号させる工夫」の一助を果たすことができるものであると考えられる。なぜなら、スクールボランティア活動は、学校現場が求める人的資源と、教職を志す学生にとっての学校現場理解を促す自発的かつ主体的活動の場として、それぞれのニーズを符号化させており、さらに、教育委員会においても人材採用の立場から即戦力となる新卒教員の獲得にもつなげられるからである。

学生は授業における実践と、ボランティアにおける実践の長短を理解し、両者を有機的に連続性・関係性を持たせながら、多様な手段・媒体を活かして学校現場での実践的・体験的活動に取り組んでいく必要がある。

Ⅲ スクールボランティアへの学生による主体的参加を促す新たな取り組みと考察

1 学生スタッフ制度の創設

2013年10月、スクールボランティアビューローに「学生スタッフ制度」を設け、半年間の試行実施を経て、2014年4月より本実施となった（2014年3月10日開催の第11回教師教育開発センター運営委員会にて承認）。

この「学生スタッフ制度」は、学生の立場から、スクールボランティア活動に学生が取り組みやすい環境の整備やスクールボランティアに関連した企画・参画・連携を通して、学校支援ボランティアについての深い理解と熱意によって、第一線でスクールボランティア活動を支援することができる人材の育成を目指している。制度導入のきっかけは、学生による意見反映が十分できていないという大学教職員側の反省から始まるものであった。これまで岡山県や岡山市をはじめ近隣自治体の教育委員会との連携を進め、学生によるボランティア活動ニーズの高まりを強く感じる中で、ボランティア活動への参加や協働の必要性を学生に対して訴えてきたものの、内容としては十分伝わっておらず、事務的な連絡で終わっていた

ように感じている。また、事業推進上の課題、例えば、学生がどのようなボランティア活動を求めているか、どのように情報収集をしているかなど、学生のライフスタイルやニーズを十分に理解し対応できていなかった。そこで、教職を強く志しスクールボランティアに関心の強い学生の声を直接聞き、事業強化を図ることができる方法の1つとして、本制度を創設した。

学生スタッフ制度は、通常の部活動やサークル活動とは異なり、大学組織を支援する学生団体という位置付けとなり、学生のみでの判断ではなく、学生からの主体的な提案・取り組みを大学として対応・支援できるか協議した後、活動が開始される方式を取る。

この制度の効果としては以下を想定している。

- ①学生スタッフの教育実践力の向上
- ②学生スタッフの地域協働および学校支援事業への理解向上
- ③学生スタッフの企画調整力（コーディネート力）およびコミュニケーション力の涵養
- ④岡山大学におけるスクールボランティア事業の活性化

このように学生スタッフとして登録した学生自身の能力向上を目指すことは重要な視点であり、学生スタッフを経験した学生が将来教員となり学校現場において学生ボランティアの人材活用・人材養成にも積極的に関わってもらいたいという長期的な効果も大きなねらいの1つである。

こうした教育効果の実現を目指して、次項では学生スタッフによる活動として考えられる事業構想について説明する。

2 学生スタッフによる事業構想

これから述べる構想事業については、制度創設時にスクールボランティアビューローの教職員で検討した内容である。すべてを実施する必要はないと考えているが、これまで教職員だけでは困難であった活動を学生目線で取り組み、ひとりでも多くの学生がスクールボランティア活動に学校現場で取り組める環境が構築できればと考えている。

（1）スクールボランティア活動啓発事業

図1・図2で示したように、岡山大学ではスクールボランティア活動への学生の登録者数は減少している。この課題に対して、より一層、学生に対する活動参加への啓発をする必要がある。また、ボランティア活動は「求める側（学校園等教育組織・団体）」

と「求められる側（学生）」の両者があって成り立つものであり、「求める側」に対しての啓発も必要である。具体的な活動として以下のような取り組みが考えられる。

①スクールボランティアに仕組みやすい環境整備

初めてボランティア活動に取り組む学生に対して、学生スタッフが同行したり、多くの学生が利用している情報収集媒体として Facebook や LINE などの SNS を活用し学生スタッフによる情報発信を行う。

②学生向けパンフレットの作成や定期広報誌の作成

学生にとってスクールボランティアを魅力ある活動、また教職を目指すための必要な活動と感じてもらうための資料を作成し、学内で広く配布する。

③学校園向け登録学生ボランティアプロモーション資料の作成

活動登録をした学生によるプロモーション資料、つまり自己 PR 資料を作成してもらい、どのような活動をしたのか、どのような支援ができるのか・取り組んでみたいのか、など具体的に示してもらう。この資料を学校園等に提供し、学生ボランティアの受け入れのための検討資料として活用してもらう。

（２）学生ボランティア支援事業

学生スタッフは教職員と連携し、ボランティア登録をしている学生のサポートに取り組んでもらう。学生にとって必要な支援を学生スタッフが実体験に基づいて企画してもらうため、学生スタッフは自ら豊富なボランティア経験が必要となり、そのための学生スタッフに対する支援もビューローの大学教職員でバックアップしていく。

①学生ボランティアバンクの構築

ボランティア活動を希望する学生に対して、マッチングを効率よく行うため、学生の情報を一元的に管理できる名簿を作成し、ボランティアバンクとして蓄積していく。学生スタッフから情報収集や学生へのコンタクトなどの面で協力・支援を得る。

②スクールボランティア学生支援活動事例集の作成

ボランティアを始めようと思っていてもなかなか一歩を踏み出すことができない学生やこれから新たにボランティア活動に取り組もうとする学生向けの資料として、実際のスクールボランティア活動事例を収集し、冊子にまとめ配布することで、活動内容に対してより具体的なイメージをつかんでもらう。

③学生向け学校園支援ボランティア活動マニュアルの作成

事例集とは異なり、ボランティア活動を実践するために必要な基礎知識、例えば、守秘義務やハウレンソウ（報告・連絡・相談）等、学校現場に関わる上で最低限必要な知識や情報、社会的マナー等をマニュアルとしてまとめ配布する。

④スクールボランティアマギスターの養成・認定

「マギスター」とは、master（英）、meister（独）と同義のラテン語であり、ボランティアの語源がラテン語であることから、同じ語源を用いた。この事業では、スクールボランティアの実践回数や研修受講などの実績によりマギスターとして認定するものである。このマギスター養成は、学生のスクールボランティアに対する意欲向上を図るものである。実際に認定する場合には、認定条件などは十分検討していく必要がある。

（３）スクールボランティア研修事業

ボランティア活動に参加する学生に対して、大学として教育の質保証をより一層担保していく必要がある。これからボランティア活動に参加しようとする学生に対しては、活動・支援内容に対する基礎的な理解を図り、既に取り組んでいる学生に対しては、その体験を共有し深化させていくことが必要である。

①学生ボランティア交流会の実施

学生ボランティア同士が集まり、また教育現場の関係者にも参加してもらい、スクールボランティアの活動内容についての意見交換やディスカッションを通して、活動への理解を深めてもらう。

②テーマ別スクールボランティア研修会の実施

学生によるボランティア活動は多岐に渡っている。教室での授業補助から身体障害を持つ児童・生徒の支援、外国人児童生徒の言語支援や学校行事での手伝い、環境整備や清掃活動まで様々である。学校現場でボランティアとして即戦力となれるよう、テーマ・活動別の研修会を実施する。研修実施に当たっては、現場教職員等を講師として協力していただきながら実施する。

③学校園と連携したボランティア活動入門の実施（特に遠方学校園支援）

「偶然訪問した学校の教員に魅力を感じたから」、「教育実習で指導した生徒と継続して関わりたいから」など、ボランティア活動は不意なきっかけから始まることがしばしばある。そうしたきっかけ作りとして、学生をボランティア活動に学生スタッ

フが引率する。大学周辺での実施では多くの学生の参加が見込めるが、この活動は現場と学生をつなぐきっかけ作りとしても重要な取り組みであるため、ボランティアの募集があるにもかかわらず、距離的な事情などにより支援が得られていない学校園等と積極的に連携し取り組む。

(4) スクールボランティア調査事業

ボランティア活動は学生の自発的な活動であるため、トラブルが発生して初めて大学への連絡があるなど、内容や実態の把握が大変難しくなっている。そのため、学生スタッフにも調査に参加してもらい、課題意識を高めていきたい。

①学校園等における支援内容現地調査

教育現場で実際に学生がボランティアとして支援・活動している内容について調査を行い、現場側で助かったことや課題と感じたことを率直な意見として調査し、大学の支援体制などの見直しに役立てる。

②ニーズ把握のための学校園教員との交流会・インタビュー実施

ボランティアを必要としている学校園や教育委員会に学生スタッフがインタビューに伺い、必要としている支援や困っている・悩んでいる事などを情報提供してもらい、それに対して学生ボランティアとして何ができるか学生スタッフと協議・検討し、可能な範囲での対応・対策を講じ、支援の充実を図る。

③学生ボランティアの参画状況の把握および活動環境に関する調査

学生ボランティアの活動状況や参画状況を把握するための調査や、活動上の不安や不満、対応上の問題などを学生から情報収集し、改善に向けた取り組みを行う。

(5) その他の事業

その他、学生スタッフとして、ボランティアを進めていく上で、教育委員会等が主催する様々なイベントや勉強会への参加・支援を通して、スクールボランティアの意義について理解を深めてもらう。

①岡山県・岡山市等が実施する関連行事への参画・支援

学校現場でのボランティアだけではなく、岡山市「学校支援ボランティア」シンポジウムでの実行委員としての参加協力等を通じ、企画実行力を高めてもらう。また、教育に関連した様々なシンポジウムや講演会などへの参加を通して、学生スタッ

フとして知見・見識を深めてもらう。

3 スクールボランティアフェアの開催

これまで述べた事業を構想実現する最初の企画として、2014年4月5日、「岡山大学スクールボランティアフェア2014」を開催した。この開催にあたっては、学生スタッフ制度（試行期）の学生が中心となり、フェアの内容について企画・立案をした。

フェア開催のきっかけは、佐藤ら（2014）で指摘した「マッチング」＝「学校園とつながる機会の提供」にある。これまで岡山大学では、自治体個別の説明会（または研修会）を実施してきた。しかし、壇上からの説明を学生は一方的に聞くに留まっており、また岡山大学が所在する岡山市以外の説明会へは参加者数も少なく、学生にとって十分魅力的な場・機会ではなかった。そこで、「学校園や教育委員会と学生が直接つながる機会」を提供するという発想から、フェアの開催に至った。

フェア開催の趣旨は、学生（大学院生を含む）が、地域の学校園において積極的にボランティア活動に取り組めるよう、関係自治体教育委員会との連携・協働により実施しており、学校（学習）支援ボランティアに関する説明（一部研修を含む）を通して学生の活動動機を高めるだけでなく、活動を円滑に始めるため各学校園担当者との直接相談・交流の場として提供するものである。

フェアでは、①教育委員会や学校園等によるブースでのマッチングと②全体イベントの実施の2種類が行われた。前者では、企業の就職活動イベントと同様に、学生は関心のあるブースに立ち寄り、担当者から直接説明を聞き、その場でマッチングをしたり、または資料等を受け取り、事後に連絡を取ったりすることができる。後者では、学生スタッフの企画・運営により、スクールボランティア活動の啓発や情報交換、また教育委員会や学校園の教職員と学生の交流など様々な学生目線での企画が行われた。この手法によるイベント開催により、学生は一方的な参加であったものから、双方向の主体的な参加となり、また直接教育現場のニーズなどを聞き、魅力を感じて活動に参加するなど能動的な態度を醸成することができたと考えている。

また、将来的にはスクールボランティアフェアへの参加については、岡山大学の学生（大学院生を含む）に限定せず、岡山県内の他の大学生にも開放し、全県体制での学生ボランティアによる教育活動への貢

献を果たしていきたいと考えている。

Ⅳ おわりに

政府や文部科学省による教員養成におけるインターンシップやボランティア活動など学校現場での体験的な学習・実践の必要性がより一層高まっていることが分かる。こうした状況に岡山大学として必要な対策を講じる必要があり、その1つの方法として、スクールボランティアビューローに「学生スタッフ制度」を設けた。これにより、学生の視点に立った、学生の企画による、よりよい教員養成のための、大学の支援につなげていきたいと考えている。スクールボランティアビューローの本来業務に学生が単なる人手として参画するのではなく、企画・立案を協働して行う仲間が増えたという気持ちである。そのため、スクールボランティアビューローの複数の教職員が学生スタッフに関わり支援しており、スタッフとして協力・参加している学生に対しては、サークル活動や授業ではできない体験や経験を多く提供していきたい。

本論では、学生スタッフ制度を概観し、その最初の活動として開催したスクールボランティアフェアの趣旨等について説明した。まずはこの制度により、ひとりでも多くの学生に、主体的なスクールボランティア活動への参加を促すことができるようになることと自負している。ただし、どのような効果や成果があるのか、また課題としてどのようなことが挙げられるか、十分に検証できていない。今後整理しまとめていきたい。

参考・引用資料・文献

- 教育再生実行会議ホームページ. (2013年1月15日). 教育再生実行会議の開催について. <http://www.kantei.o.jp/jp/singi/kyouikusaicei/kaisai.html>.
- 教育再生実行会議. (2013年5月28日). これからの大学教育等の在り方について (第三次提言).
- 教育再生実行会議. (2014年7月3日). 今後の学制等の在り方について (第五次提言).
- 文部科学省ホームページ. (2013年12月18日). 教員養成分野のミッションの再定義結果 岡山大学. http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/1342089.htm.
- 中央教育審議会. (2006年7月11日). 今後の教員養成・免許制度の在り方について (答申). http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337006.htm.
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会. (2014年11月6日) これからの学校教育を担う教員の在り方について (報告) 一小中一貫教育制度に対応した教員免許制度改革一.
- 岡山大学大学院教育学研究科・教育学部・教師教育開発センター編. (2010～2013). 平成21～25年度連携協力事業研究報告書.
- 岡山県教育委員会. (2011～2014). 平成23～26年度岡山大学大学院教育学研究科・教育学部・教師教育開発センターと岡山県教育委員会との連携協力会議または連携協力会議専門部会配布資料「『教師への道』 インターンシップ事業について」.
- 佐藤大介, 山根文男, 江木英二, 曾田佳代子. (2014). 岡山大学におけるスクールボランティア事業の取組と課題—学生の意識調査の結果から—. 岡山大学教師教育開発センター紀要, (4), 6-15

A New Support Program to Urge University Students to Participate in School Volunteer Activities

Daisuke SATOH^{*1}, Fumio YAMANE^{*2}, Eiji EGI^{*2}, Kayoko SODA^{*2}, Hiroyuki KONDOH^{*2},
Daisuke GOTOH^{*2}

Recently, it must be more necessary to experience educational activities in a school in teacher training program. Education Rebuilding Council (Japanese government) and Central Council for Education (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology) emphasize on volunteer activities in a school before teacher employment. However, the registration number of students for school volunteer is decreasing at Okayama University, because school internship was adopted as a compulsory subject in Faculty of Education. Students have to understand differences between “internship” and “volunteer”, and participate in volunteer work aggressively. “Student Staff Service” was organized in School Volunteer Bureau to respond to the social demand and try to solve the problem of Okayama University. In this service, student staffs plan and join in school volunteer activities from the students’ points of view, and collaborate with university staffs to urge students who want to become a teacher to participate in school volunteer activities. School Volunteer Fair 2014 was held as a first event by student staffs.

Keywords: Teacher Training Program, School Volunteer, Student Staff Service

※ 1 Academic and General Okayama University Regional Research Association, Okayama University

※ 2 Center for Teacher Education and Development, Okayama University.
